

映画「スパルタカス」の見どころ

#1 リビアの石切場



- ・ 作品冒頭、主人公スパルタカスがバティアトゥスに剣闘士奴隷として買われる場面。過酷な奴隷労働の典型である「石切場」の情景は強い印象を残す。
- ・ ロケは米国カリフォルニア州の景勝地であるデス・ヴァレーにて行われ、この場面は最初の監督アンソニー・マンの演出がそのまま使用されている。

#2 カプアの剣闘士養成所



- ・ バティアトゥスが経営する剣闘士養成所で、ストーリー前半の重要な舞台。
- ・ 剣闘士の訓練のさまがなかなか興味深く、また過酷でがんじがらめな生活も垣間見させる。登場する訓練器具が更に興味深い。
- ・ 入浴の場面でドラバが呟く「(いつ殺し合うことになるかもしれないから) 友人など作らない」という台詞は重い。

#3 スパルタカスとヴァニリアの出会いー「動物じゃない！」



- ある日の夜、カプア養成所の女奴隷が集められる。女奴隷たちは順に剣闘士奴隷の穴ぐら部屋へと連れて行かれた。彼女たちは剣闘士奴隷のひと時の快樂のためにあてがわれたのである。
- スパルタカスのところにはヴァリニアという美しい女奴隷が来た。スパルタカスにとって女は初めてだったが、彼は襲い掛かったりはせずヴァリニアの髪を撫で、穏やかに振舞っている。
- 既に“あきらめて”いるヴァリニアが自ら裸になったその時、部屋の天井の格子から下世話な笑い声が届く。バティアトゥスと剣闘師範マーセラスが二人を“見物”しようというのだ。追い払おうとしても二人は格子に飛びついたスパルタカスの手を小突き、ニヤニヤするばかり。
- スパルタカスは断乎拒否する。他に一切の愉しみもない剣闘士奴隷の生活で、女を抱けるというのは逃し難い快樂だろう。しかし彼は毅然と叫ぶのだ。「(俺は) 動物じゃない！」するとヴァニリアも衣服を直し、凜とした表情で言い放つ。「私もよ。」
- ヴァリニアは他の剣闘士奴隷のところへ連れていかれた。しかし、この時スパルタカスとヴァリニアはお互いを認め合い、恋に落ちたのである。

#4 ドラバとスパルタカスの死闘



- ・カプア剣闘士養成所のバティアトゥスのところへ、ローマの有力者にして名高い武人クラッススがやってくる。するとクラッススが伴ってきた夫人らローマ貴族の女たちは養成所で行うことが忌避されてきた剣闘士の死闘（命を懸けた真剣勝負）を、今すぐここで見たいと所望してきた。クラッススからの要請とあればバティアトゥスは断れない。
- ・かくして内面は下劣に爛れた貴婦人たちによって剣闘士が選ばれ、2組の対戦が行われる。貴婦人たちは文字通り敗者に死を望んだ。
- ・貴婦人たちに軽蔑の眼差しを送っていたためスパルタカスも選ばれてしまい、養成所でも屈指の三又槍の使い手、レティアリィ（網闘士）のドラバと闘うこととなる。
- ・スパルタカスも持ち前の才能と勇猛さで立派に戦うが、実力はやはりドラバが上。遂には追い詰められ、ドラバにとどめを刺されるのを待つばかりとなる。クラッスス夫人は「早く殺せ」と要求する。



- ・するとドラバは槍を下ろし、次の瞬間、槍を2階の見物席に投げ込むやバルコニーに飛び上がって見物席のクラッススへと迫った。ドラバの背後から槍が投げられ彼は致命傷を負うーそれでもクラッススに迫ろうとするドラバに対し、クラッススは沈着かつ冷徹に短刀でとどめを刺した。



反逆者ドラバの死体は養成所で見せしめのため、何日もの間吊るされた…。ドラバは奴隷たちの中でも一目置かれる存在であったし、この事件は後の剣闘士奴隷叛乱へと繋がっていくことになる。

- ・控室で前の仕合に聞き耳を立てる場面、激しい命のやり取りとなる死闘、そしてドラバの最期と、過不足のない残酷描写ならびに息を呑む緊迫シーンの連続は洵に見応えがあり、前半の白眉である。キューブリック監督の優れた手腕が発揮された典型と評される。観る者に激しい嫌悪を抱かせずにはいない、この一連の場面におけるローマ貴婦人らの下劣さの描写・演技もなかなかのものである。

#5 スパルタカスの決意と奴隷「軍」の創立

- ・カプア剣闘士養成所で自由を求め蜂起した奴隷たちのリーダーとなったスパルタカス。制圧した養成所には奴隷たちの歓声が響く。スパルタカスが駆けつけてみると、そこにはかつて自分たちが強いられた命懸けの決闘を捕えたローマ兵に課し、見物する側に立った奴隷たちの姿があった。※
- ・スパルタカスは直ちに決闘を止めさせ、奴隷たちを諭して宣言した。
「俺は自分に誓った。決闘で死ぬ人間を見るぐらいなら命を絶つと。ドラバも同じ誓いを立て、それを守った。俺も守る。」



- ・これ以降、スパルタカスは奴隷たちの集団から一層深い信頼を集め、彼らを「軍」へと組織し、ローマとの戦いに次々と勝利していく。物語終盤に、海賊からの「あなたとあなたの親しい者だけは船で逃がしてあげる。」という誘いを間髪入れず一蹴するシーンがあるが、それとともに彼の気高い精神性を印象付けるエピソードである。
※尚、史料によってはスパルタカス自身がローマ兵捕虜に死闘を課し、復讐を実行したと記されたものもあるが、この映画ではそれと全く反対の高潔な人間性のスパルタカスを描いた。

#6 スパルタカスの告白



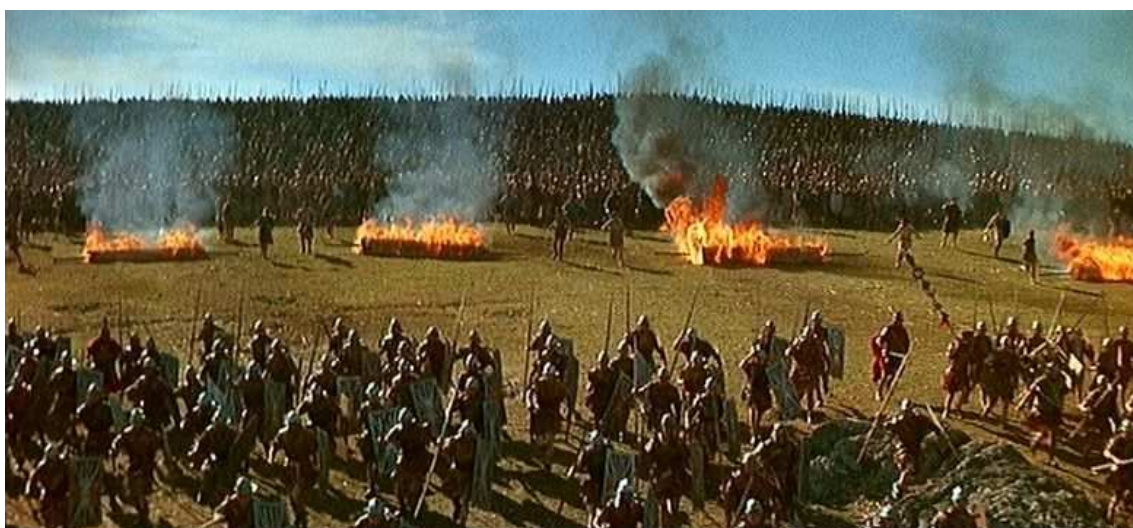
- ・ローマ軍に対し勝利を続けてきたスパルタカスであったが、最終目標であった船でのイタリア国外脱出→故郷への帰還がギリキア海賊の裏切りによって断たれた今、クラッスス率いるローマ軍との最終決戦に臨むほかなくなっていた。
- ・さしもの勇猛果敢なスパルタカスもこの最終決戦の厳しさを予期し、その前夜初めてヴァリニアに包み隠さぬ思いを吐露する。彼には間もなく生まれてくる子供に対する熱い願いがあった。

「俺は奴隷の神を想像して祈るんだ。息子が自由の身で生まれると。

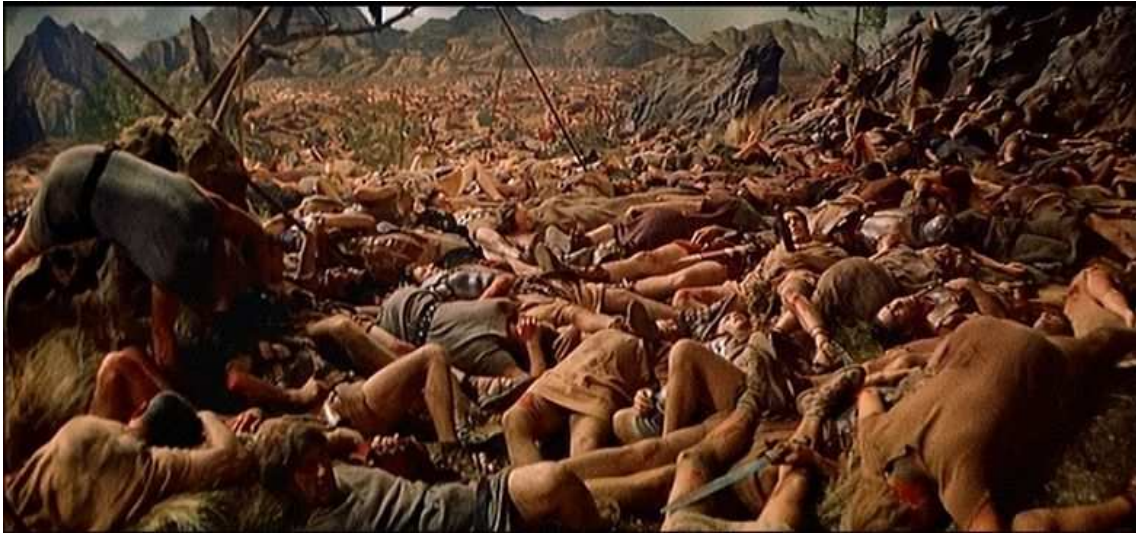
息子を頼んだぞ、ヴァニリア。

俺の話をしてやってくれ。どんな男で、何を夢見たか。お前の口から真実を…。」

#7 奴隷軍とローマ軍の最終決戦



- ・丘の上に布陣する奴隷軍に、圧倒的多数で威圧的に近づいてくるローマ軍重装歩兵団の不気味さときたらこの上ない。これに対し火焰を上げながらローマ軍へと転がり落ちていく丸太を先頭に一斉に切り込んでいく奴隷軍の先制攻撃一。緊張と迫力の壮大な戦闘シーンが展開される。残虐性も含め過不足なく、最終決戦の激烈さが伝わる名シーンである。キューブリック監督はローマ重装歩兵を演じさせるのに本物の軍隊を所望してスペインロケを敢行、本当にスペイン軍を動員したという逸話が残る。
- ・この最終決戦のシーンは極めて周到に設計されたものである。即ち戦闘シーンを3分割し、以下①②③を1/3ずつ配分したのである。
 - ①両軍が敵にどう向かうか：交戦前の作戦会議、両軍の行動・外見・陣地などカメラを切替えながら見せる。
 - ②実際の戦闘シーン：両軍の激突。終盤にはざっと戦場全体を見渡す。
 - ③戦闘の後の描写：去る者、息絶える者、倒れる者…そしてまた戦場を見渡す。
 特に①を十分な尺で丁寧に作り込んだという。ローマ軍の集結、奴隷軍も並び準備を調えるさま、ローマ軍が動き出すところに多くの時間を費やして緊張感を高め、戦闘シーン全体に強弱をつけたのである。



- ・ 決戦は奴隷軍の敗北に終わり、戦場には奴隷軍兵士やその家族たちの屍が累々と横たわっている。足の踏み場もないほど、見渡す限り一面に屍が敷き詰められたさまを直截に見せる映像には息を飲まされる。
この最終決戦が如何なるものであったかを、観る者の身に迫らせるのである。

#8 「俺がスパルタカスだ！」



- ・ 最終決戦に敗れたスパルタカスは、弟分のアントナイナスとともにローマ軍の捕虜となっていた。※
- ・ 勝利したクラッススは、ローマを再三苦しめた奴隷軍の指導者であるスパルタカスに脅威を感じており、本当に死んだのか執拗に確認しようとする。そして捕虜たちに対しこのように布告するのだった。
「奴隷軍捕虜は全員磔（はりつけ）の刑に処するが、1つの条件のもとにこれを免除する。スパルタカスという奴隷を指し示せ！生きていれば本人を、死んでいれば死体を。」磔になれば、1週間、10日と苦しみ抜いて死んでいくことになるー。

- これを聞いて覚悟を決めたスパルタカスが自ら腰を上げた瞬間、「俺がスパルタカスだ！」という声が響く。何と奴隷たちが次々と「俺がスパルタカスだ！」と叫んで立ち上がっている。そして遂には捕虜全員が立ち上がった！
- 信じられない光景に呆然とするクラッスを睨みつけるスパルタカス。その頬には一筋の涙が伝うのだった
 ※史実ではスパルタカスは人間の姿を留めぬほどに切り刻まれ、壮絶な戦死を遂げたとされる。

#9 「はりつけにはさせません」

- かつて自分が所有していた奴隷のアントナイナスと共にいる只ならぬ雰囲気のある男。ついにクラッスは“この男がスパルタカスだ”と確信する。スパルタカスの命は今やクラッスの手中で如何ようにもなるはずなのに、スパルタカスには怖れる様子もなく逆にクラッスに侮蔑の眼差しを向ける。苛立ったクラッスが思わずスパルタカスを激しく打擲すると、スパルタカスはクラッスの顔に唾を吐きかける。怒り狂ったクラッスはスパルタカスとアントナイナスにその場で死闘を命じた。しかも、勝者は直ちに磔の刑に処すというのだ…。
- 剣闘となれば詩人のアントナイナスがスパルタカスに敵うはずもない。なのに、アントナイナスは全力でスパルタカスに立ち向う。そして凜と言い放つのだ。
 「はりつけにはさせません！」



- ひと思いに殺されるより遥かに長く苦しみが続く残酷な刑にこの人を遭わせるくらいなら、いっそ自分の手で—
 スパルタカスも思いは同じ。健気なアントナイナスに自らの手で最期を迎えさせ、スパルタカス自身は磔になることを選んだのだった。

#10 「愛しいあなた…」

- ・クラッススとの政争に敗れ、誇りある自害を選んだローマ民衆派の重鎮グラッカスは、復讐のため最後に自分の権力で今やクラッススの奴隷となっていたヴァリニアと息子を自由の身とし、バティアトゥスとともに逃亡させた。
- ・晴れて自由の身となり、荷馬車でアッピア街道へ発とうとしたヴァリニアの眼に映ったのは一何ということか…磔となり死の淵にいるスパルタカスの姿だった！



ローマ警備兵の目を気にして静止するバティアトゥスを振り切り、ヴァリニアはスパルタカスへと歩み寄る。息子をスパルタカスの前にかざし、彼の望み通り自由の身になったことを伝え、約束通り息子にスパルタカスのことを話して聞かせる、と話しかけた。もはやスパルタカスの目は虚ろで、ヴァリニアの声が届いているのかも判らない。

(虚ろな眼の、ニュアンスに富んだ絶妙なカーク・ダグラスの表情の演技が凄い！)

- ・溢れる涙とともにヴァリニアが祈る。

「愛しいあなた お願い 死んで 早く 早く死んで あなた
神様、死なせて！」

もう発たねばならない。荷馬車はスパルタカスから離れてゆく。そして磔の十字架が立ち並ぶアッピア街道を淡々と進むラストシーン※となる。



※尚、この最終盤のシーンには別バージョンの「1967年版」があるのだが、それはカメラアングルが全く違い、礫になったスパルタカスの表情が映ることはない。スパルタカスは既にこと切れている、というニュアンスの表現となっている。

【出典・参考】

DVD 「スパルタカス スペシャル・エディション」
(2012年/ジェネオン・ユニバーサル)

— APPENDIX —

私はこの「スパルタカス」という映画を観て、すっかりジーン・シモンズ(Jean Simmons)という女優さんのファンになってしまった！最後に素敵な彼女の写真を載せておきたい。



まさに“正統派美人女優”！
ちょっとオードリー・ヘプバーンと共通する魅力も感じられたりして。^^)

この映画での演技も素晴らしかったと思うのだが…。
キャスティング段階で制作側が嫌気していたという、彼女のクイーンズ・イングリッシュはそんなに違和感あるのだろうか。ネイティブの方はどう感じるのかな？

